

Mahidol-Osaka Mini-Symposium に参加して

11 月 22 日に大阪大学とタイ王国マヒドン大学との大学間交流の一環として、Mahidol-Osaka Mini-symposium がマヒドン大学にて開催されました。本交流プログラムでは、大学間連携の学位取得プログラムの紹介を行った後に、化学専攻および高分子科学専攻の研究紹介として、各分野の教員が関連する研究室と自身の研究の紹介を行いました。物性物理化学研究室からは山下が参加し、物理化学系研究室の紹介と物性測定手段としての熱容量測定に関する研究例の紹介などを行いました。マヒドン大学の化学専攻からも各分野の教員が研究分野の紹介があり、互いの研究フィールドについての理解を深め合いました。シンポジウムは、昼食と 2 回のブレイクを挟んだ 4 セッション構成となっており、近い研究分野の発表が大阪大学側とマヒドン大学側で交互に発表する形式となっていました。コーヒブレイクではスナックが提供されるとのアナウンスがありましたが、実際にはコーヒの他に小ぶりのパンが 3-4 個ほど入ったボックスにさらにもう一品ついてくるという大変ボリュームの高い内容になっていました。逆に昼食はサイズの小さめなお弁当となっており、タイでの食事スタイルの一端を知ることが出来ました。昼食を早めに食べ終わったため、急遽残りの時間を利用した研究室ツアーが開催されました。昨年度に訪れたタイ北部に位置するチェンマイ大学では天然物抽出やそれに関連する研究が中心となっていました。マヒドン大学では錯体・有機合成や計算機科学系の分野も目立っており、共用の測定装置が潤沢でした。このあたりの違いは、大学に出資している企業の種類にもある程度依っているようで、タイ王国の首都バンコクに位置することも関係しているようです。また、キャンパスツアーもあり、マヒドン大学にある大阪大学オフィスや月に数回開催されるキャンパス内でのバザー見学なども行いました。物販系のバザーでは、日本語の記載があるお菓子なども多数販売されているなど日本文化の影響も多々見られました。また、シンポジウムにも日本への留学経験がある学生が何人か参加していました。

シンポジウム終了後には、交流も兼ねたバンケットが行われました。シンポジウムが開催された 11 月 22 日は、ちょうど冬季の始まる前日に当たる季節の切り替わりで、花等で装飾されたろうそくを川に流すタイ伝統のお祭りが開催されており、街中には活気があふれていました。冬とはいっても気温は 30 °C を超えており、湿度も高いため、長袖では暑いと感じる気候でしたが、このような気候の変化が少ない地域だからこそその盛大な祭りだとも感じました。シンポジウムの翌日には、引き続いて交流プログラムが実施され、マヒドン大学の学生も交えて、アユタヤ遺跡群を見学しました。バンコクから車で 2 時間ほどかかるアユタヤ地区の気候は、バンコクに比べると湿度が低く快適さはありませんでしたが、日差しはとて強く現地の方でも防止が必須なほどでした。バンコク市内にも仏教寺院は数多くありますが、そうした雰囲気とはまた異なった日本の奈良にあたるような雰囲気を感じることが出来ました。こうした印象はマヒドン大学の学生にとっても同様のようで、記念写真などを撮っているなど、学生にとっても楽しいイベントであったようです。こうした文化的な理解も国際交流では重要であり、逆に日本文化の知識も我々にとって必要であると実感させられました。

(山下智史)

